

大学スポーツ振興の推進事業
(大学スポーツアドミニストレーター配置事業)
実施報告書

学校法人 法政大学

目次

事業実施概要	3
第1パート 体育会学生の学業および卒業後の進路に関する実態調査	6
第2パート 卒業生の知識能力・精神的健康度・ワーク・エンゲイジメントに関する比較分析	11
第3パート 卒業後の体育会学生達のスポーツ・ライフ・バランス実態調査・分析	19
第4パート 体育会学生のキャリア教育・修学支援施策実施と先進事例からの学び	22
あとがき	30

事業実施概要

事業の実施概要は以下の通りである。

事業名	大学スポーツアドミニストレーター主導による体育会学生のキャリア形成支援体制の構築	
事業の目的	体育会学生が自分らしいキャリアを選択し、『スポーツ・ライフ・バランス』を実現するための支援モデル構築を目指す。	
事業実施期間	2019年9月17日～2020年3月19日	
事業内容	取組 1	
	名称	体育会学生の学業および卒業後の進路に関する実態調査
	目的	在学中に体育会に所属していた学生たちの学業成績と、卒業後の進路に関する規定要因を明らかにする。
	取組 2	
	名称	卒業生の知識能力・精神的健康度・ワーク・エンゲイジメントに関する比較分析
	目的	体育会に所属していた者たちだけでなく、広く卒業生たちに実施したアンケート調査して、大学時代と卒業後に得た知識や能力や、精神的健康度・ワーク・エンゲイジメントを体育会と非体育会で比較分析する。
	取組 3	
	名称	体育会学生達のスポーツ・ライフ・バランス実態調査・分析
	目的	体育会の1年生を対象として、スポーツ・ライフ・バランスやその関連要因（メンターの有無等）について調査を行い、その実態を把握する。
	取組 4	
	名称	体育会学生のキャリア教育・修学支援施策の実施と先進事例からの学び
	目的	キャリア教育・修学支援施策の実施および、先進大学の事例から、体育会学生のキャリア形成を促進するために有用な学びや研修のあり方を学ぶこと。

●事業実施体制

【保健体育センター】

- ・センター長 徳安 彰
- ・事務部長 喜嶋 康太
- ・事務次長 増田 昌幸
- ・市ヶ谷体育課長 細沢 潤介
- ・市ヶ谷体育課員 釜野 祥太郎

【スポーツ研究センター】

- ・センター長 杉本 龍勇

【スポーツ・サイエンス・インスティテュート(SSI)運営委員会】

- ・副委員長 荒井 弘和

●本報告書内の用語について

本学ホームページならびに荒井ほか(2018:スポーツ産業学研究)を元に解説する。

1. デュアルキャリア

デュアルキャリアとは、スポーツと勉強・仕事などの組み合わせのことを指す。わが国では、2016年4月から大学スポーツの振興に関する検討会議が開始され、大学生アスリートへの学習支援・キャリア支援の充実について検討が進められている。スポーツ庁・経済産業省による「スポーツ未来開拓会議」の中間報告では、大学生アスリートが適切な学修支援を受けられるようにすることや、デュアルキャリアに関するプログラムの実施・普及を通して、アスリートが自らのキャリアを主体的に考えられるようになることが期待されている。

2. スポーツ・ライフ・バランス

スポーツ・ライフ・バランスとは、アスリートの競技以外の生活側面に焦点を当てる考え方であり、デュアルキャリアを実現することを目指して、アスリートのある時点における生活に着目した考え方である。勤労者について、仕事だけではなく生活にも焦点を当てる「ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）」という考え方が浸透しつつある。この考え方をアスリートに援用したのが「スポーツ・ライフ・バランス」である。

私たちは、以下の4点から、スポーツ・ライフ・バランスが重要と考えている。(1)健康状態や生活の質と関連すると考えられるため。(2)競技ばかりに執心することにより学習が疎かになることを防ぐため。(3)キャリアについて近視眼的になりすぎず、自らのキャリアを長期的かつ幅広く見通す機会を提供するため。(4)体育会学生の人権に配慮し、学生生活を主体的に組み立てられるように支援するため。

3. スポーツ・サイエンス・インスティテュート(SSI)

「スポーツに優れた者の特別推薦入学試験」により入学した学生を対象に、2005年に開設した学部横断型体育会学生共通教育課程である。学生は学部のカリキュラムを学びながら、同インスティテュートの

科目を履修する。同インスティテュートの修得単位は、卒業所要単位に充当することが出来る。

4. 体育会学生

本事業では、できるだけ学生アスリートだけでなく、マネージャー、トレーナー、学生コーチなどを含む体育会学生を対象としている。体育会に所属する学生たちは、在学中にアスリートから別の役割に変更することも少なくないためである。

5. 著名 400 社

著名 400 社は、(株)大学通信が日経平均株価指数の採用銘柄、企業規模、知名度、大学生の就職人気企業ランキングなどを参考に選定しているものである。

第1パート

体育会学生の学業および卒業後の進路に関する
実態調査

本パートでは、在学中に体育会に所属していた学生たちの学業成績と、卒業後の進路に関する規定要因を明らかにするために、既存のデータを用いて集計・分析を実施した。

1.1 使用したデータ

2014年度から2017年度の4年間に本学を卒業した体育会所属学生(以下、体育会学生)1,577名分のデータを使用した。データには、入試種別(一般, 推薦, 付属), 競技種別(団体・個人), 出身地(関東首都圏・それ以外), 出身高校の大学進学レベル(5段階), 高校時代の学業成績(高校3年間の評定平均値), 大学の学業成績(大学4年間の平均GPA), 卒業後の進路(著名400社・それ以外)の項目が収められている。

1.2 体育会学生の基本的な属性

体育会学生を、入学経路(入試種別)により3つのグループ(一般, 推薦, 付属)に分けた。「一般」とは、一般入試や指定校, その他の特別入試で本学に入学した学生たちである。「推薦」とは高校時代にスポーツで優れた成績をあげて, スポーツ推薦で本学に入学した学生たちをいう。「付属」とは, 本学にある3つの付属高校のいずれかを卒業生して, 内部推薦で入学した学生たちのことである。

まず, 入試種別では, 「推薦」が54.2%で全体の半数以上を占めて最も多い。次いで「一般」が28.5%である。最も少ないのが「付属」で17.2%となっている。性別を見ると, 男性1,220人で全体の8割近くを占めている。女性は357人で2割近くに留まっている(図表1)。

図表1 性別と入試種別のクロス表

		入試種別			合計	
		一般	推薦	付属		
性別	男	度数	270	712	238	1220
		行%	22.1%	58.4%	19.5%	100.0%
	女	度数	180	143	34	357
		行%	50.4%	40.1%	9.5%	100.0%
合計	度数	450	855	272	1577	
	列%	28.5%	54.2%	17.2%	100.0%	

1.3 大学時代の学業成績(GPA)の比較

次に, 入試種別ごとに大学時代の学業成績(GPA)の平均値を比較した(図表2)。その結果, 「一般」の平均が2.20で最も高く, 次いで「付属」が1.97, 最後に「推薦」が1.85であった。平均値の差の比較をおこなったところ, すべての入試種別ごとに統計的に有意な差があることがわかった($p < .0001$)。

しかし, そもそも学生たちの所属学部は, 本学の全15学部に分散しており, また本学の場合, 一部の授業で「推薦」で入学した学生向けのカリキュラムを設けていることから単純な比較はできない。

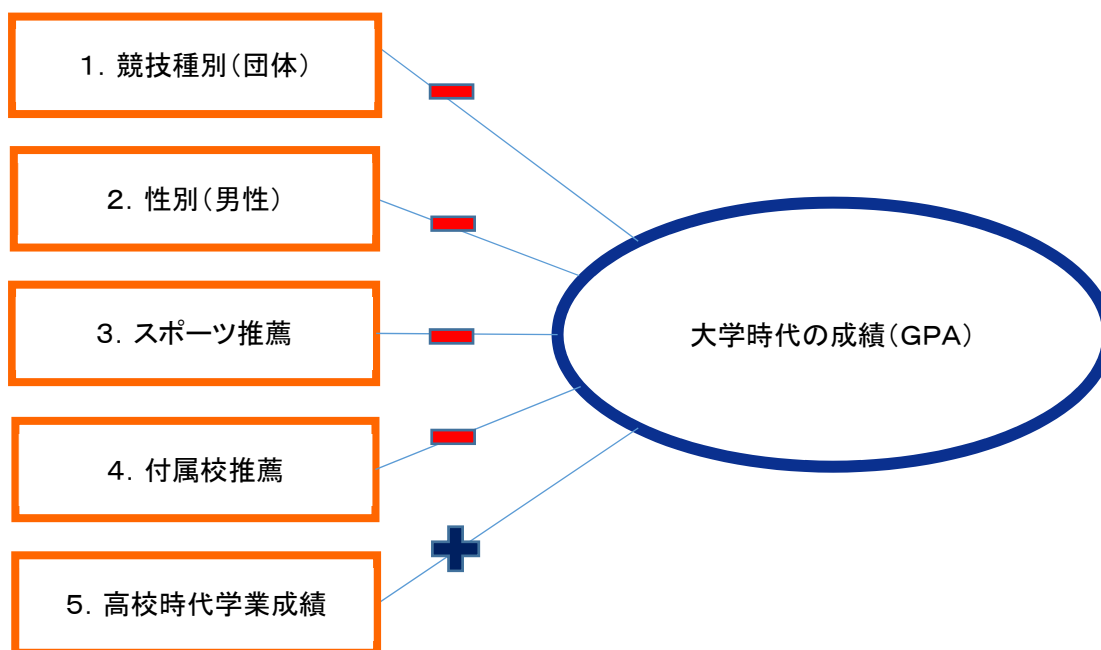
図表2 入試種別ごとのGPA平均

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
一般	450	2.2040	0.50952	1.07	3.72
推薦	850	1.8541	0.41102	0.91	3.40
付属	272	1.9725	0.44034	1.10	3.51
合計	1572	1.9748	0.47103	0.91	3.72

1.4 大学の時代の成績の規定要因

大学時代の成績(GPA)は、どのような要因によって規定されるのか。それを探るため、競技特性(団体競技・個人競技)、性別、入試種別(推薦・付属)、高校時代の学業成績(評点平均値)を規定要因として、次のようなモデルをつかって重回帰分析をおこなった(図表3)。

図表3 大学時代の成績(GPA)を規定する要因



分析の結果、すべての要因が統計的に有意に大学時代の成績(GPA)に影響を及ぼしていることがわかった($p < 0.001$)。

まず、プラスの効果は1項目のみであり、高校時代の学業成績(高校評点平均値)であった。次にマイナスの効果は4項目で、団体競技、男性(女性とくらべて)、スポーツ推薦(一般入試とくらべて)、付属高校推薦(一般入試とくらべて)であった。

プラスとマイナスすべての要因(独立変数)で、大学時代の成績(GPA)の24.6%を説明している。プラスとマイナスも含めて、影響の強いものを標準化された係数で見ると、プラスでは高校評点平均(0.232)、マイナスではスポーツ推薦(-0.263)と男性(-0.259)であった。

1.5 卒業後進路(著名400社・それ以外)の規定要因

学生・保護者も含めて卒業後の進路についての関心は高い。むろん、就職できるか否かという問題もあるし、多くの学生の進路になっている民間企業についていえば、どういった企業に就職できるか、という点に関心の的になる。

近年は民間企業のみならず、多様な進路をとる学生もあり、必ずしも大手・著名企業に就職したい者ばかりではないと推察されるが、全体的な傾向からすれば、依然として根強い大手志向も見取れる。そこで、学生たちの進路で、著名400社に内定した者と、そうでない者の規定要因を探ることとする。

分析の結果、一部の項目が統計的に有意に著名400社の内定に影響を及ぼしていることがわかった(図表4)。まず、今回の分析で規程要因として統計的に有意だったのは、団体競技、関東の首都圏出身者、付属高校の出身者であった。

具体的には、団体競技の出身者は、個人競技の出身者の約2倍、関東の首都圏の出身者は、そうでない者の約1.6倍、付属高校出身者は一般入試で入学した者の約2倍著名企業に内定を得ていることになる。

一方、性別、大学時代の学業成績(GPA)、高校時代の学業成績(高校評点平均値)、スポーツ推薦による入学者(一般入試と比較して)は、統計的に有意な差は見られなかった。

図表4 卒業後進路(著名400社・それ以外)の規定要因

	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
性別(男性ダミー)	0.122	0.175	0.487	1.129
競技種別(団体競技ダミー)	0.718	0.135	0.000	2.051
出身地(関東首都圏ダミー)	0.486	0.154	0.002	1.626
大学時代の学業成績(GPA)	0.057	0.159	0.723	1.058
高校時代学業成績(評定平均値)	0.123	0.139	0.377	1.130
スポーツ推薦ダミー	0.031	0.168	0.851	1.032
付属校推薦ダミー	0.705	0.201	0.000	2.024
定数	-2.214	0.629	0.000	0.109

1.6 小括

本パートでは、体育会に所属する学生の大学入学時の入試種別によって、大学時代の学業成績(GPA)に差があることや、その差を規定するプラスおよびマイナスの規程要因が明らかになった。さらに、卒業後の進路について、大学生に人気のある著名400社への内定実績から、その規程要因の一部も明らかになっている。

こうした実態分析によって、これまで「体育会学生」として大括りに語られることが多かった体育会所属学生たちであるが、その属性にも着目するきっかけとなった。また、これまで印象論で語られがちであった、体育会学生=就職に強い、というような言説についても、規定要因の一部が明らかになったことによって、今後の分析課題も見出すことができたものと考えている。

たとえば著名400社への内定実績で、なぜ団体競技出身者や付属高校出身者は、そうでない者たちよりも著名企業への内定で高い実績をあげているのか、その理由は明らかになっていないなどである。

第2パート

卒業生の知識能力・精神的健康度・ワーク・エンゲイジメントに関する比較分析

本パートでは、体育会に所属していた者たちだけでなく、広く卒業生たちに実施したアンケート調査及び人事担当者インタビューの結果をもとに分析を行う。とりわけ本パートでは、濱中(2013: 検証・学歴の効用)による調査項目や分析枠組みを援用して、大学時代と卒業後に得た知識や能力の特徴を、体育会に所属していた者たちとそうでない者たちを比較しながら分析した。

2.1 アンケートの概要

アンケートの対象者は、卒業後10年以内の若手卒業生5,776名である。この5,776名は、在学中に体育会に所属していた者(以下、体育会)と、そうでない者(以下、非体育会)とが、50%(2,888名)ずつになるようにランダムに選ばれた者たちである。さらに男女の内訳についても、体育会、非体育会とも男性2,269名、女性619名になるようサンプル数を調整している。

調査期間は2019年10月24日～11月15日までで、アンケートの有効回答数は521件(回収率9.0%)であった。アンケートの質問項目は以下のとおりである(図表5)。

図表5 「大学生の卒業後のキャリア形成と健康」に関するアンケート調査項目

項目	内容
I. 回答者の属性に関する情報	年齢, 性別, 職業, 勤務先業種, 所属企業規模, 居住形態, 年収, 同居人数, 結婚の有無, 健康状態
II. 大学時代の取組に関する情報	体育会所属の有無, ボランティア活動実績, コミュニティ所属数, 役職経験, 読書量, 大学時代に熱心に取り組んだ事柄, 大学卒業時点で有していた能力
III. 現在の取組に関する情報	読書量, 現在有していると思われる能力
IV. 現在の心理状況に関する情報	主観的幸福度, 仕事への意識に関すること, 他者への相談状況に関すること, 日常生活での心的ストレスに関すること

2.2 アンケート回答者の主な属性

回収したアンケートを体育会所属有無, 年齢カテゴリー, 性別にわけてクロス表を作成した。年齢の回答がなかったものは本分析から除いている(35件)。

回答者の割合について、まず体育会の所属有無は、所属ありが49.4%、所属なしが50.6%であり、アンケートを発送した割合とほぼ一致した。次に、年齢は、25歳以下が40.1%、29歳以下が31.1%、33歳以下が28.8%で、年齢が上がるごとに回答者が少なくなっている。これはもともと発送した比率と一致している。年齢が上がるごとに、転居などの理由により連絡先の把握率が下がるためである。最後に性別は、男性が70%で女性が30%であった。発送の男女比8対2であったことを考えると、女性の回答割合が多かったといえる(図表6)。

図表6 体育会と年齢カテゴリーと性別のロス表

			年齢カテゴリー			合計	
			25歳以下	29歳以下	33歳以下		
男性	体育会	所属あり	度数	57	52	48	157
			総和の%	16.8%	15.3%	14.2%	46.3%
	所属なし	度数	72	51	59	182	
		総和の%	21.2%	15.0%	17.4%	53.7%	
	合計	度数	129	103	107	339	
		総和の%	38.1%	30.4%	31.6%	100.0%	
女性	体育会	所属あり	度数	42	21	20	83
			総和の%	28.6%	14.3%	13.6%	56.5%
	所属なし	度数	24	27	13	64	
		総和の%	16.3%	18.4%	8.8%	43.5%	
	合計	度数	66	48	33	147	
		総和の%	44.9%	32.7%	22.4%	100.0%	
合計	体育会	所属あり	度数	99	73	68	240
			総和の%	20.4%	15.0%	14.0%	49.4%
	所属なし	度数	96	78	72	246	
		総和の%	19.8%	16.0%	14.8%	50.6%	
	合計	度数	195	151	140	486	
		総和の%	40.1%	31.1%	28.8%	100.0%	

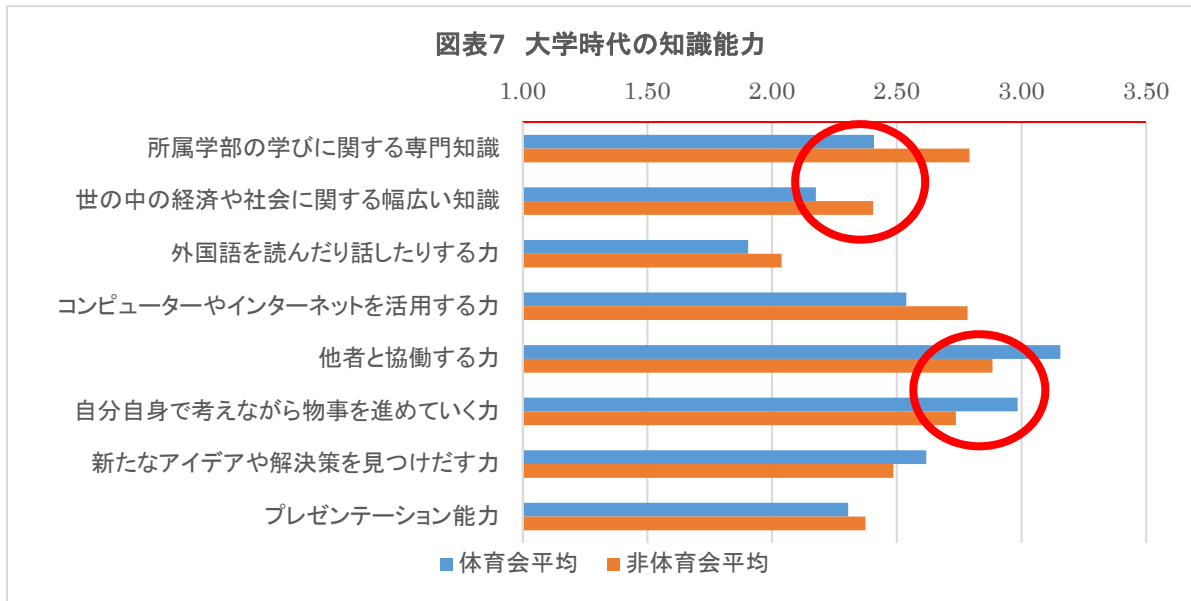
2.3 大学時代の知識能力の比較

大学時代の知識能力(8項目)について4件法で自己評価をしてもらった(図表7)。これらの項目の平均値を算出して、卒業生を体育会所属の有無で比較した。

特徴的なのは、「所属学部の学びに関する専門知識」や「世の中の経済や社会に関する幅広い知識」といった、知識系の能力について、非体育会の者たちのスコアが高いことである。

それに対して、「他者と協働する力」や「自分自身で考えながら物事を進めていく力」といった活動系の能力については、体育会のスコアが高かった。これらは統計的にも有意な差があることがわかっている(p.<0.05)。

一方、両者に差があるとはいえない項目として、「外国語を読んだり話したりする知識」、「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」、「プレゼンテーション能力」が認められた。



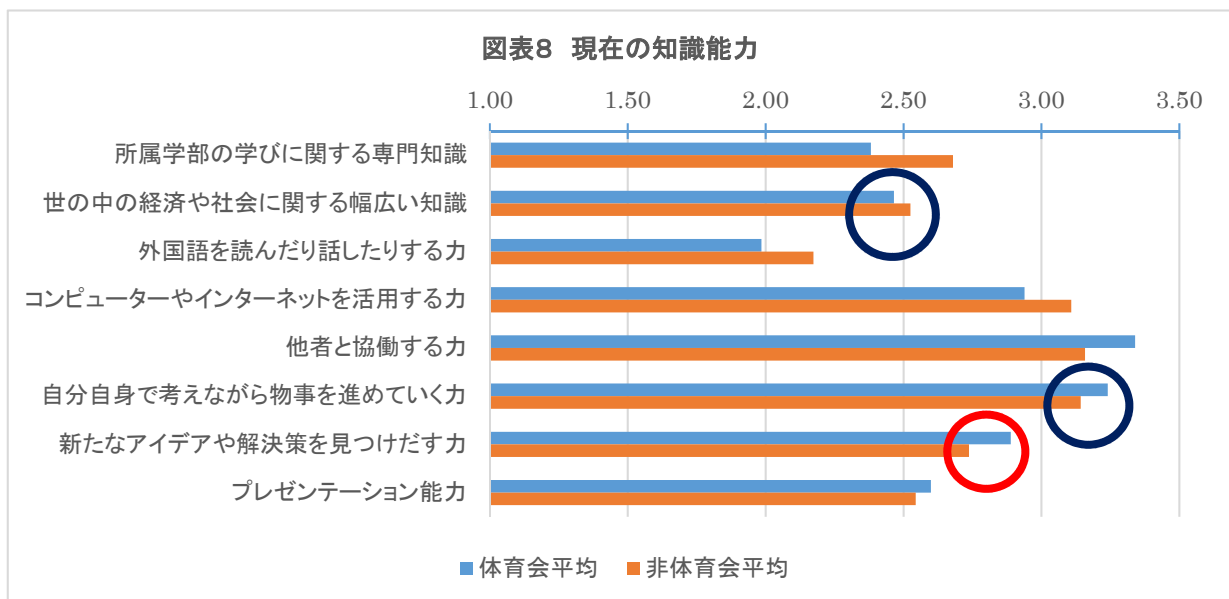
2.4 現在の知識能力比較

現在の知識能力についても、大学時代と同様に(8項目)を、4件法で自己評価してもらった(図表8)。これらの項目の平均値を算出して、体育会所属の有無で比較した。

この比較からいえることは、大学時代には認められたが差が、社会人になってから変化して、両者のあいだで差があるとはいえなくなった項目があることである。

たとえば、「世の中の経済や社会に関する幅広い知識」、「自分自身で考えながら物事を進めていく力」である。前者は、体育会が知識を増やし、後者は非体育会が能力を伸ばした結果であるといえる。その結果として両者に統計的な差は見られなくなった。

反対に新たに差が生じた項目もあった。「新たなアイデアや解決策を見つけだす能力」であるが、これは大学時代には差が認められなかった項目である。しかし、社会人になってから差が認められるようになった。



2.5 体育会と非体育会の知識能力に関する小括

個々の項目による差はあるが、体育会と非体育会の大学時代の知識能力の合計スコアを見ると、それぞれ 21.5 と 22.3 でその差は 0.8 である。それが卒業後には、それぞれ 23.56 と 23.71 へと増加して、結果として両者の差は僅か 0.15 になる。

両者とも卒業後に社会人となって、すべての項目で知識能力を伸ばしている。そのなかで両者の差が少なくなっているのは、体育会の学生は社会人になって、「経済や社会に関する知識」を身につけて、知識不足を改善する傾向にあることや、非体育会の学生との間で、最も差が開いていた「学部の学びに関する専門知識」についても、体育会の学生も非体育会の学生も社会人として、学部の専門以外の幅広い知識を学んでいかなければならないことで、結果として差が縮小している。(図表 9)

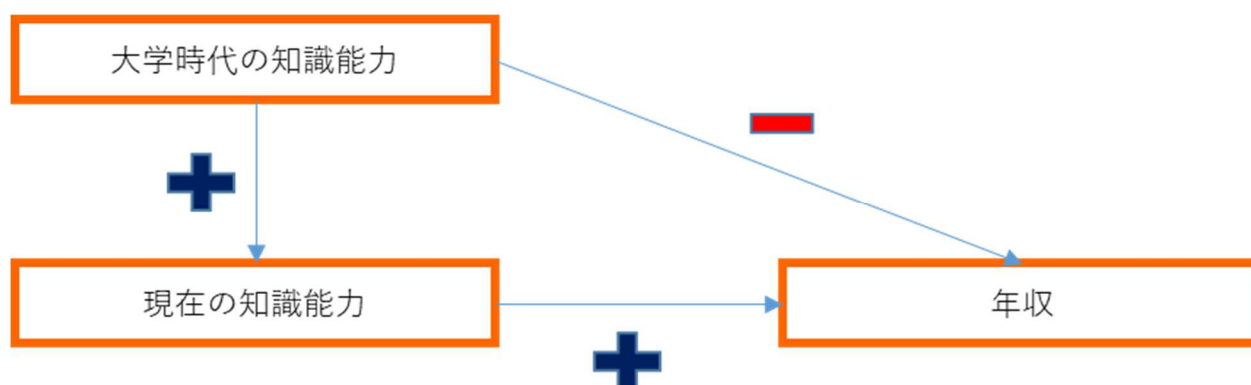
図表9 体育会と非体育会における知識能力(合計スコア)

所属	現在知識能力	大学時代知識能力	現在知識能力－大学時代知識能力
体育会	23.56	21.5	2.06
非体育会	23.71	22.3	1.41
体育会－非体育会	-0.15	-0.80	0.65

2.6 大学時代の学習効果

大学時代に得た知識と能力が、その後の知識と能力、さらには年収といった経済的な面にどのような影響を及ぼしているのか、いわゆる教育の効用を濱中(2013)の分析枠組みを援用してパス解析をおこなった(図表 10)。年収については、「あなたの年収について最も近いものを一つ選択してください」という項目に対する回答を求めた。「0 円～100 万円未満」=「1」、「100 万円以上～300 万円未満」=「2」、「300 万円以上～500 万円未満」=「3」、「500 万円以上～700 万円未満」=「4」、「700 万円以上～1,000 万円未満」=「5」、「1,000 万円以上」=「6」と得点化している。

図表10 大学時代および現在の知識能力と年収の関係



結果は体育会・非体育会ともに、「大学時代の知識能力→年収」という直接効果はマイナスであった ($p<0.05$)。一方、「大学時代の知識能力→現在の知識能力→年収」という間接効果はプラスになった ($p<0.001$)。しかし、直接効果と間接効果を足し合わせた総効果はプラスとなった(図表 11)。この結果は、濱中(2013)における結果とも一致しており、大学時代の学習効果をさらに肯定する結果となった。

本調査の対象者は、22 歳から 33 歳までで、比較的若い卒業生たちであるが、40 歳以上の大卒者も対象にしている濱中(2013)では、「大学時代の知識能力→現在の知識能力→年収」のパス係数は、キャリアの後半になるにつれてさらに強化されていることが明らかになっている。

年収は若年層では差がつきにくい側面があるが、年齢が上がるほどに明確になってくるものと思われるので、今後、年齢層の範囲を広げた調査を検討したい。

図表 11 大学時代および現在の知識能力と年収の関係

	直接効果	間接効果	総効果
	大学時代の知識能力→ 年収	大学時代の知識能力→ 現在の知識能力→ 年収	大学時代の知識能力→年収 + 大学時代の知識能力→現在の知識能力→年収
体育会	-(マイナス)	+(プラス)	+(プラス)
非体育会	-(マイナス)	+(プラス)	+(プラス)

2.7 現在の精神的健康度

以下の分析では、可能な限り(たとえば性別の回答が欠損していたとしても)、多くのデータを含めている。

内閣府の調査で使用される項目を用いて収集された主観的幸福度(最高 10 点、高い方が好ましい)の平均値は、体育会卒業生が 7.35 点、非体育会卒業生が 6.85 点であった。心理的ストレス(最高 5 点、低い方が好ましい)の平均値は、体育会卒業生が 1.84 点、非体育会卒業生が 2.05 点であった。t 検定の結果、これらの差はいずれも統計的に有意であった($p<.01$)。よって、非体育会卒業生よりも、体育会卒業生の方が卒業後の精神的健康はやや好ましいといえる。

2.8 現在のワーク・エンゲイジメント

対象者の中から、就業していない者(体育会卒業生では 13 名、非体育会卒業生では 20 名)を除いて、ワーク・エンゲイジメント(最高 6 点、高い方が好ましい)について比較を行った。厚生労働省によると、ワーク・エンゲイジメントとは、仕事に関連するポジティブで充実した心理状態のことをいい、「仕事から活力を得ていきいきとしている」(活力)、「仕事に誇りとやりがいを感じている」(熱意)、「仕事に熱心に取り組んでいる」(没頭)の 3 つの状態から構成される。

t 検定の結果、「熱意」では体育会卒業生 3.78 点・非体育会卒業生 3.50 点、「活力」では体育会卒業生 3.15 点・非体育会卒業生 2.75 点、「没頭」では体育会卒業生 3.31 点・非体育会卒業生 2.97 点であった($p<.05$)。よって、非体育会卒業生よりも、体育会卒業生の方がワーク・エンゲイジメントはやや高いといえる。

2.9 採用側企業の人事担当者インタビュー

アンケート調査は回答者の自己申告に基づくものであったため、ここでは受け入れ先である企業側の人事担当者たちに話を聞いた。とりわけ体育会卒業生の特徴を把握するために、体育会の採用を経験したことのある人事経験者(A氏、B氏、C氏の3名)にインタビューを実施した。

2.9.1 体育会学生の強みについて

体育会学生を一般化するのは容易ではないが、あえて人事担当者の方々にその特徴を語っていただいた。特徴として、学生時代の経験の挙げる声が多かった。

A氏は、新卒採用者に求める資質として、『学生時代にものごとを達成した経験があるか』、『チームの中で協働できるか』、『リーダーシップを発揮して、他者に影響を及ぼす経験をしているか』などを挙げた。A氏によれば、体育会学生は、競技活動のなかでこれらを日常的に経験している人が多いので、就職活動では有利に働くのではないかと述べた。

B氏は『体育会は自分自身が苦しい経験して、それらを乗り越えてきている人いて、他者の困難にも寄り添える人物が多いこと』、『体育会の上下関係の影響からか、部下や後輩たちを守る』といった行動を取る人がいることも特徴として挙げた。こういった特徴は、組織のなかでマネージャーや役員として活躍するうえで強みになっている、という印象を持っていた。また、コンプライアンス遵守の姿勢や、結果の良し悪しを潔く受け受け止めることができるのも、いわゆるスポーツマンシップが根付いているせいかも知れないと語っていた。

C氏は非体育会でもアルバイトやサークルで、同じような経験をしている人もいるはずだとする。しかし、体育会活動のなかで得られる経験とは、かなりの差があるのではないかという。また、体育会ならではの特徴として、『体育会出身者は自分の哲学を持って努力し続けることができる人がいる』ことや、『挫折から立ち上がった経験を持っていて精神力が強い人が多い』という印象を強調した。

人事経験者へのインタビュー全体を通して、体育会学生の目標達成への意欲、他者との協働・他者への寄り添い、困難への対応といった点で強みがあることがわかった。これらが、就職活動時や実社会では大きな強力な武器となっている可能性が示唆された。

2.9.2 体育会学生の課題について

B氏は、就職後も競技を継続する学生のケースを挙げてくれた。企業によっては競技継続が可能なところもある。しかし、現役のうちから、競技生命が終了したあとのキャリアについてイメージを持っている人とそうでない人とは、競技引退後の社会人としての活躍に大きな差がでるといえる。引退後も活躍できる人は、現役のうちから先輩たちの話を聞くなどして、競技終了後のビジョンを持っている。そのためスムーズに仕事に移行して、先にあげた強みを生かして、社内でも活躍する。一方、ビジョンや覚悟を持たないまま競技を引退すると、その後は仕事にも注力できず、結果として離職してしまうケースも見られるという。

C氏は、体育会学生が厳格な上下関係を経験してきたことの弊害を指摘している。たとえば、組織や上司に従順すぎて、ときに自ら考えて行動することがおろそかになっている。つまり批判的に物事をみて判断するという思考が停止するということである。

また、若いころから競技に一筋で打ち込んできたエリート体育会学生ほど、競技と離れて実務の世界に溶け込むためには時間がかかるという指摘もあった。つまり、競技実績が役に立たない世界で、一から学ぶ難しさがあることがわかる。

2. 10 小括

本パートでは、体育会に所属していた者たちだけでなく、広く卒業生たちに実施したアンケート調査の結果をもとに、大学時代と卒業後に得た知識や能力の特徴や、それらと年収の関係、さらには卒業後の精神的健康やワーク・エンゲイジメントを、体育会に所属していた者たちとそうでない者たちを比較しながら分析を行った。加えて、卒業生たちの受け入れ側である企業の人事担当者方々にインタビューを実施した。

まず、知識能力について、体育会は非体育会と比較して、大学時代の知識能力は低めである。しかし、卒業後にその差を縮小させている。また、体育会は卒業後に「新たなアイデアや解決策を見つけ出す能力」を伸ばさせているという結果も出ており、これらがいわゆる「伸びしろ」の実態かも知れない。

次に、知識能力と年収の関係であるが、体育会・非体育会に関わらず、「大学時代の知識能力→現在の知識能力→年収」という間接効果はプラスという結果が出ている。しかし、今回の調査対象者を若手卒業生に限定していることから、年収のバラツキを少ないこともあり、効果を見るには十分とはいえなかった。今後は、調査の範囲を広げて、卒業後 20 年、30 年といった層の人たちの実態を把握することで、知識能力と年収の関係を確認できるものと考えている。

さらに、非体育会卒業生よりも、体育会卒業生の方が卒業後の精神的健康やワーク・エンゲイジメントは好ましいことが示唆された。このことは、学生時代の体育会活動が何らかのポジティブな効果をもたらしている可能性を示しているのではないだろうか。厚生労働省は 2011 年に、「がん」「脳卒中」「急性心筋梗塞」「糖尿病」という従来四大疾病に「精神疾患」を加えて五大疾病と呼ぶようになった。2015 年 12 月からは、ストレスチェック(心理的な負担の程度を把握するための検査)制度が開始され、検査が定期健診に含まれるようになった。このような現代において、社会における体育会卒業生の価値はますます高くなるように思われる。

人事担当者へのインタビューでは、体育会学生の特徴的な強みと課題の両方が示された。強みは、学生時代の濃密な経験から学んだ、物事を成し遂げる能力や、他者と協働する能力、さらにリーダーシップやスポーツマンシップなどである。一方、課題は組織や上司に従順すぎて、物事を批判的に見て行動する力が足りない場合があることや、優れた選手ほど、競技生活が終わったあとのキャリアに展望が持ちにくい可能性が示唆された。

第3パート

卒業後の体育会学生達のスポーツ・ライフ・バランス実態調査・分析

本パートでは、体育会に所属している大学1年生を対象として実施したアンケート調査の結果をもとに分析を行う。このアンケート調査では、本事業の中心的なテーマであるスポーツ・ライフ・バランスやその関連要因に注目する。

3.1 アンケートの概要

アンケート調査では、体育会に所属する1年生のうち、調査に同意しなかった1名を除く180名（男性136名、女性44名）を対象とした。

3.2 体育会学生のスポーツ・ライフ・バランス

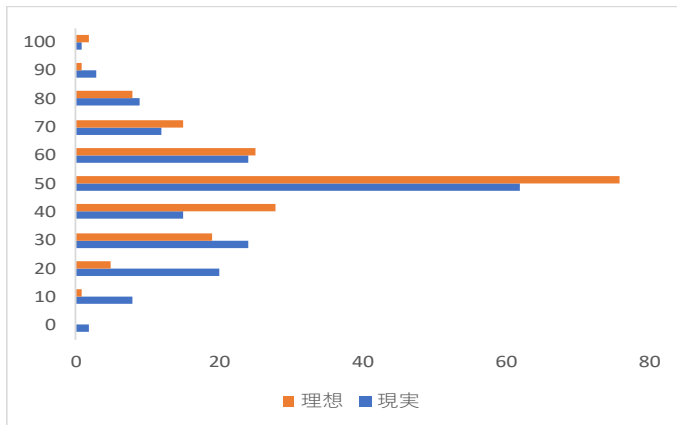
競技生活と競技以外の生活のバランスについて、時間的側面と精神的側面の2つの側面を想定し、それぞれについて「バランスの現状」と「理想のバランス」をたずねる。「競技生活のみ(0)」から「競技以外の生活のみ(100)」の11段階で評価させている。なお、「理想のバランス」から「バランスの現状」を減ずることで、「理想と現実のギャップ」を算出する。

図表12 スポーツ・ライフ・バランスの評価項目(アンケート用紙から転載)

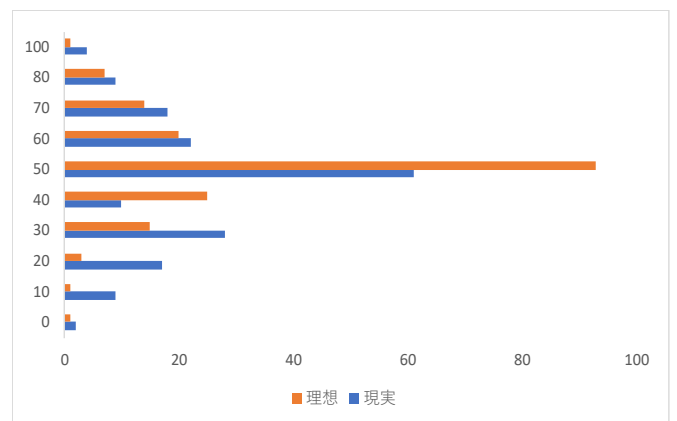
	競技生活のみ	どちらも同程度	競技以外の生活のみ
1. 現在のあなたは、「競技生活」と「競技以外の生活」の 時間 のバランスが、どのような 状態 になっていると感じますか？	0	10 20 30 40 50 60 70 80 90	100
2. 現在のあなたは、「競技生活」と「競技以外の生活」の 時間 のバランスが、どのような状態で保たれているのが 理想 だと考えていますか？	0	10 20 30 40 50 60 70 80 90	100
3. 現在のあなたは、「競技生活」と「競技以外の生活」の 精神的 なバランスが、どのような 状態 になっていると感じますか？	0	10 20 30 40 50 60 70 80 90	100
4. 現在のあなたは、「競技生活」と「競技以外の生活」の 精神的 なバランスが、どのような状態で保たれているのが 理想 だと考えていますか？	0	10 20 30 40 50 60 70 80 90	100

分析の結果、体育会学生においては、現実のスポーツ・ライフ・バランスと理想とするスポーツ・ライフ・バランスに差があり、理想よりもやや競技生活寄りになってしまっているようだ(図表13 および図表14)。中には、理想と現実に大きな差がある学生もいた。このことから、体育会学生のスポーツ・ライフ・バランスに注目することの重要性がうかがわれる。

図表13 スポーツ・ライフ・バランスの分布
(時間のバランス)



図表14 スポーツ・ライフ・バランスの分布(精神的なバランス)



3.3 体育会学生の人的資源

先行研究を参考に「あなたには、あなたが一人の人間として成長するために、大きく貢献してくれる人はいますか？」という問いを設定し、メンターの有無について回答を求めた。その後、その属性を「家族」「運動部の関係者」「運動部以外の競技関係者」「その他」の中から、複数回答可で回答させた。

メンター（あなたが一人の人間として成長するために大きく貢献してくれる人）の結果を照会すると、「いる」と回答した学生は 162 名であり、90%の学生にメンターはいることがわかった。具体的には、「家族」がメンターであるという者は 115 名で多く、続いて「部の関係者」を挙げた者が 82 名いた。部以外の競技関係者を挙げた者が 37 名で、その他が 35 名であった。つまり、メンターがいる学生は多いものの、その大半が家族や部の関係者であることが明らかとなった。

また、「あなたには今、大学内に、勉強や大学生活について相談できる先生が何人いますか？」という問いによって、相談できる先生がいるかたずねたところ、「いる」と回答した者はわずか 57 名であり、70%近くの体育会学生が相談できる先生はいないと考えていることが明らかとなった。

3.4 小括

本アンケート調査の結果から、体育会学生のスポーツ・ライフ・バランスに注目することの重要性が示唆された。とくに、現実のスポーツ・ライフ・バランスの理想とするスポーツ・ライフ・バランスのギャップが認められたことから、学生自身に自分のスポーツ・ライフ・バランスを考える機会を提供することが大事ではないかと考えられる。また、スポーツ・ライフ・バランスを考える際に重要な要素と考えられる人的資源については、体育会学生において、その家族や所属する部の関係者以外の人的資源を充実させる必要があると考えられる。

第4パート

体育会学生のキャリア教育・修学支援施策実施と先進事例からの学び

図表16 各タイプ別特徴一覧表

フィードバック① 各タイプ別特徴について	
<p>P:プロモーター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイデア豊富 ・社交的でオープン ・人のモチベーションを挙げる ・変化に強く順応性が高い ・新しい事を始めるのは得意だが飽きる ・よく話す ・話の展開が早い ・事をしきるのが得意 	<p>C:コントローラー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動的、エネルギー ・支配的、威圧的 ・起業家タイプ ・単刀直入な物言い ・人の話を聞かない ・弱みは見せない ・人間関係より仕事
<p>S:サポーター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人を援助することを好む ・暖かく穏やか、気配り上手 ・協調性、意欲が高い ・他者の気持ちに敏感 ・仕事よりも人間関係 ・計画や目標を立てることに関心がない ・人の期待に応えるような行動をとる 	<p>A:アナライザー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動は慎重 ・客観的、冷静 ・計画を立てたり、分析するのが好き ・粘り強く、堅実な仕事をする ・感情表現は苦手 ・明確で理論的な話し方 ・安定した安全な人間関係を好む <p style="text-align: right;">自由を生き抜く実践知</p>

図表17 各タイプ別コミュニケーション方法

フィードバック② 各タイプ別コミュニケーション方法				
	質問するとき	肯定するとき	要望するとき	ポイント
コントローラー	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ聞きたいのか、疑問する理由をつたえてから ・回りくどい質問の仕方は避ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・達成時にピンポイントで ・過度な褒め言葉は機能しない ・「リーダーシップ」「行動力」を承認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・短く、簡潔に、要点のみ ・幅から埋めずストレートに 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示、命令、コントロールをしない
プロモーター	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に発想できる環境を与える ・質問の開口を狭めない 	<ul style="list-style-type: none"> ・回数は多いほどよい ・「さすが」「すごい」「素晴らしい」を随所に伴う表現が機能する ・「アイデア」「社交性」を承認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・全面的に任せられることが好き ・細かい指示は好まない 	<ul style="list-style-type: none"> ・否定をしない ・自由にさせる
サポーター	<ul style="list-style-type: none"> ・威圧的な態度をとらない ・安心して応えられる環境をつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ・努力を成果に対して「！」メッセージを使って承認していることを伝える ・「君は〜という影響を私に与えてくれる」「勇気」「気配り」を承認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的に要望に対して「ノー」を言わない ・要望したときの相手の表情や態度など、言葉に現れないメッセージを読み取る 	<ul style="list-style-type: none"> ・威圧しない ・頻りに声を掛ける
アナライザー	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に質問をする ・答えを急がない ・抽象的な質問はしない 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に、論理的に ・抽象的な承認は機能しない ・「観察」「知性」を承認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・要領の内容、目的、経緯などについて事前に十分に説明しておく 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペースを乱さない ・急な、または大きな変化を求めない

4. 1. 3 実施結果のまとめ

受講者にとって、①「プロモーター」、②「コントローラー」、③「サポーター」、④「アナライザー」といった区分けそのものも新鮮だったようで、客観的に自分自身のタイプを知ることができたという点で、受講者の参加満足度に寄与している。また、自分自身のみならず、相手のタイプを知ることによって、より適切なコミュニケーションを取ることができるようになるため、今後はそちらに期待したい。

一方、研修参加者同士の活発なコミュニケーションを期待していたが、想像するほどのレベルには到達しなかった点は今後の課題となった。研修のあり方を見直して修正したい。

4. 2 2年生向け研修会の実施について

第3パートで、体育会学生のスポーツ・ライフ・バランスと、それを考える機会を提供する人材を充実させる必要があることが示唆された。そこで、体育会の2年生を対象にスポーツ・ライフ・バランスに焦点を当てた研修の実施を企画した。体育会2年生は1年間の学生生活で、授業と体育会活動を一定のバランスでやり遂げてきた学生たちであり、3年生のように就職活動中でもなく、4年生のように引退を控えているわけでもないからである。そういった世代の学生たちに、「競技とスポーツの両立」「デュアルキャリアの実現」を目的とした研修を実施した。

4. 2. 1 研修内容の策定について

研修内容は、体育会学生たちの興味を引き付けるために、受講者自身にとって日頃から馴染みのあるテーマ選びを意識した(図表18)。

また、研修形式も講義ではなくゲーム形式として、ゲームを通じて自らの競技生活とリンクさせた。これにより楽しみながら取り組んで、終了後には一定の気づきが得られるような内容を目指した。

研修の開発にあたっては、一般企業等の社員研修で実績のある、株式会社 HEART QUAKE に協力を依頼した。同社の代表取締役である千葉順氏は、本学でも兼任講師としてキャリア教育を行ってお

図表18

<p>役割カード 学生A</p> <p>レギュラー</p> <p>最後の大会で準優勝以上 であればプロ入り可能</p>
--

り、体育会学生たちの実情や気質をよく理解している点で適任であった。また、研修本番前には体育会本部の学生たちに協力を依頼して、開発したゲームのテストプレイを実施し、最終調整を行った。

4.2.2 研修の実施

研修は市ヶ谷キャンパスで体育会2年生(約300名)を集めて実施した。

ゲームは4~5名に分かれて行われ、最終目標は自分の目指すキャリアを実現することとし、ゲーム上では「プロ入り」か「就職」か2択で選んで、それを実現すべく日々の取組を検討していくシミュレーションゲームである。

プロ入りや就職するためには図表18のような条件があり、割り振られた初期設定値(図表19)から『練習を通じてパフォーマンスゲージを高めて、『最後の大会で優秀な成績を収めること』もしくは『学業を通じてキャリアゲージを高めて』で条件クリアを目指す。いずれの条件も満たせなかった場合については、本ゲームではフリーターとして卒業するとしている。なおそれぞれ選択できる行動については効果と副作用が設定されている(図表20)。

また本ゲーム内における学生の立場は団体種目の体育会部活動の一員として設定されており、自身の行動として学業を選択することは個人の就職においては有利となるが、一方でチームの競技成績は上がらないことでプロ入りを希望する学生にも影響を与えてしまうといった、集団生活を送るなかで競技と学業のバランスを取らなければならないという体育会学生の難しい現実を再現している。



テストプレイの様子

図表19



図表20

行動	効果	副作用
練習	出目が3以上 ⇒パフォーマンスが1増加	疲労が1増加 ⇒疲労が5以上はの場合はサイコロを振り、出目が4以上で「怪我」
	出目が2以下 ⇒パフォーマンス上がらず	
オフ	出目が4以下 ⇒疲労が1減少	なし
	出目が5以上 ⇒疲労が2減少	
学業	キャリアが1増加	出目が5以上⇒疲労が1減少
		出目が2以下⇒疲労が1増加 ⇒疲労ゲージが5以上の場合はサイコロを振り、出目が4以上で「風邪」
怪我 or 風邪	翌週はお休み。 疲労が2減少。	怪我⇒パフォーマンスが1減少
		風邪⇒キャリアが1減少

ゲームの流れは、「イベントの発生(例:大学代表に選ばれる等) → グループ内ミーティング → 自身の行動選択(勉強・練習・オフ) → 行動効果の発生」という流れを6回繰り返し、6回目終了時点で自身の競技ゲージ・キャリアゲージの状況で目標を達成したかどうかをもって判定する。またゲーム終了後、就職やプロ入りした後の生活についてもフィードバックとして解説している。一例をあげると、『ゲーム終了時の競技ゲージが十分でないままプロ入りを果たしてしまうと、短期間で引退、キャリアゲージの状況により正規雇用もしくはフリーターとなる』や、『キャリアゲージが中途半端なまま就職すると、希望の仕事に就くことができず転職してしまう』といった設定がされている。

4. 2. 3 実施結果

受講者アンケートによる受講者の生の声を以下のとおり抜粋した。

「自分は部活ばかりやっているのでもスポーツ選手になれた後でも引退してから色々大変な事が多いと分かったのでしっかり学業もしていきたいと思いました。」

「このゲームを通して、練習・学業を中途はんばに取り組んでいても、プロにもなれないし、就職もできないどっちつかずになってしまうので、早く進路を決めて、それに向かってどうすればよいか計画性を持ちたいと思った。」

「実業団に入りたいと考えていた時期もあったけど、改めて今回のゲームをやり将来について考えるとずっと現役でいるのは難しいのだなと感じました。」

「このスポーツ・ライフ・バランス体験ゲームは、非常に現実的で自分の学生生活と照らし合わせられる所が多かった。やはり、部活動と学業の両立は、ゲームの中でも難しい部分はある。だからといってどちらかがおろそかになってしまっただけでは、今後の自分自身の将来の選択肢が限られてしまうなと改めて感じた。」

上記のように好意的な意見が多くみられ、また主催者の望んでいた効果を生み出すことができたものと思われる。また、個々人のキャリアという視点ではなく、チームビルディングという視点で部の運営を考える契機にもつながったことという感想もあった。

「一人が練習ばかりやっても他の人がしなければ優勝できないし、一人が勝手に学業やってしまうとそれも優勝できないことがわかった。全員の道を全員で考えて、互いに協力しあうといいことがわかった。」

今後の改善点として、「ルールが複雑」であるといった指摘もあり、次年度以降のためにさらなる改良が望まれた。

4. 3 他大学の支援状況について

本学の研修については分析結果を踏まえて上述のような取り組みを実施したが、他大学ではいったいどのようなキャリア教育・修学支援施策を講じているのか。次年度以降の参考とするために、研修実施と並行して関西学院大学、大阪体育大学、筑波大学に訪問し、インタビューを実施した。

4. 3. 1 関西学院大学の事例

関西学院大学では、2019年度からアスリートの学修基準を設定した。学修状況によっては競技活動の制限をするものである。本学でもそうした基準設定について問題意識を持っているが、基準そのものあり方や、基準を満たさない学生への修学支援体制の構築といった課題もあり、実施までには相当の距離がある。

聞き取り調査では、関西学院大学の基準設定の経緯や、学修基準を満たすのが難しい学生等への支援施策を中



研修会の様子

心に話を伺った。

基準を設定した背景としては、大学の社会的責任論であったという。社会に人材を送り出す高等教育機関の役割として、体育会学生であろうとなかろうと、学修レベルについては責任を負うという考え方である。その責任を果たすために、たとえば競技活動による授業の欠席等については、特別な配慮は行わないというものである。

大学によっては、体育会の学生の競技活動を支援するために、授業出席について一定の配慮を行うところもある。そうした流れとは明らかに一線を画している。このような考え方については、体育会各部の指導者にも共通の理解として根付いており、部によっては独自に修学への取り組みを強化しているところもあるという。

学修基準については、いくつかの段階を示しているが、4年間で卒業が困難な学生については、最長6年間で卒業するようなプランを立てる。たとえば、卒業所用単位を6で割り、各年その単位数を下回った場合は競技活動を禁止するというものがある。

修学基準導入初年度であるが、既に何名かの学生が基準を満たすことができずに、修学支援プログラムを受講している。内容は学びの根幹的な能力でもある読解と文章作成が中心で費用は大学負担となっている。

4.3.2 大阪体育大学の事例

大阪体育大学では、体育会学生に対して学業の基準は設けていない(2020年2月現在)。しかし、体育会学生の修学状況には、強い危機感を持って取り組んでいることが確認できた。たとえば、入学前の学力チェックがある。授業開始日までに新入生全員に対し、プレースメントテストとして「国語」「数学」「英語」のテスト(学部によって一部科目が変わる)を実施し、いくつかの基礎的な教養科目は学生の学力を踏まえたレベル別クラス編成を行っていた。

このテストの成績が悪く下位クラスに配属された学生については、学習支援室と呼ばれる講師・学生チューターが常駐する自習室に通うことを、授業内で強く求めるなどの継続的なサポートを実施していた。今後は、プレースメントテストの結果と、入学後の単位取得の関係についても調査を行う予定であるという。

入学後の学生でも、学習支援室や教養教育センターとが連携し、教養科目について修学が困難と判断される場合、学生本人が、気軽に相談できる仕組みが整えられている。また専門科目についても、現在支援体制を検討中であるとの話である。2019年度秋学期には試験的な取り組みとして、2019年度春学期時点で2020年度から導入予定の修学基準をクリアできていない学生についての対応として、面談と学習支援室の学生チューターによる指導が実施したとのことであった。

次に、学生たちのキャリア支援について、大学の組織的な取り組みについて伺った。同大学の特徴として、キャリア支援センターの利用率が高いことが挙げられる。その要因との一つとして、通常の授業日丸1日を利用したキャリア教育に関するプログラム(キャリアフェスタ)を実施していることがある。原則、全学生が出席するもので、学年別に集中的なキャリアに関する教育を実施している。その他の具体的なプログラムとしては、たとえば、2年生にはグループ面談、3年生には個人面談を実施している。これにより、キャリア支援センターそのものに対する認知があがるだけでなく、センターの担当者と学生たちが双方向にコミュニケーションを取ることで、その後のキャリア支援センター利用へのハードルを下げている。また、アプリでの情報発信についても、学生とキャリア支援センターとのコミュニケーションを活発にしている要因のひとつと思われる。さらに同大学は、体育の専門大学であることから、多くの在学生在が体育会に所属している。そのため、体育会ならではの慣習で、先輩から後輩へと伝統が受け継がれているおり、キャリア支援センターの活用メリットについても、それらが確実に伝わっている点も見逃せない事実である。

同大学は、スポーツ関連企業や体育教員としてのキャリアだけでなく、一般企業や行政など多岐にわたる進路を目指せるように学生を支援している。また、先に述べた学習支援室は、通常の修学支援のみならず警察・消防などの公務員採用試験や教員採用試験の試験対策などキャリア教育とも密接にかかわるサポートなどにも力を入れており、学生に対する幅広いサポートが行われていた。

4.3.3 筑波大学の事例

筑波大学では、長年体育会関係者として体育会学生に係り、社会に優れた人材を送り出してきた体育会野球部長木内教授のキャリア支援の方向性をお伺いした。筑波大学野球部ではプロを目指す学生が入学してくることもあるが、実際にプロ入りを果たす人間は、他大学の例に漏れずほんの僅かである。現在の野球界は、今までよりもプロへ行くための道筋が増えており、夢を追う学生にとってはチャンスと捉える一方、キャリアを形成する上では危うさもあるように感じているとのことであった。

具体的には、これまでは高校・大学・社会人野球がプロに至る唯一の道となっており、大学でプロ入りできない場合は社会人チームに就職し、仕事と競技を両立しつつプロ入りを目指すか、もしくは引退して企業人になるという道であった。現在は各地に独立リーグが設立されており、アルバイト等をしつつセミプロ選手として競技に注力し、プロを目指すといった、新たな道ができています。実際、筑波大学野球部OBでも独立リーグを経てプロ入団を果たした実績もあり、学生にとってはチャンスが広がり良いことではある。

その一方で独立リーグからのプロ入り断念や早期引退となってしまった場合、近年変わりつつあるとはいえ新卒や第二新卒からの就職経験を重視する日本社会の性格上、引退後のキャリア形成が困難になる危険性も広がっているとも考えられる。こうしたことは決して野球のみに言えることではない。このような懸念への対応策として、日常的な接点の少ない大学関係者からの諫言といった趣ではなく、最も選手の身近にいて日頃から十分なコミュニケーションをとっている指導者が曖昧にせず言葉にしてアドバイスすることが、学生にとっては辛い経験かもしれないが、将来的なキャリア形成という観点からは望ましいだろうとの考えであった。

また木内教授の研究において、セルフマネジメントスキルと愛知教育大学の坂柳教授が提唱する「成人キャリア成熟度尺度」との関係性を分析すると、日頃より日記をして自身を振り返るなど自己内省性の強い学生ほど自律性が高く、キャリア成熟度も高いということが判明した。そこで野球部では日々の糧を言語化することを勧め、指導者からのアドバイスと並行して、自身のキャリアに対する客観的な視野を持たせられるように指導しているとのことであった。

4.4 本学における支援事例：保健体育センターと教学組織との連携

スケート部スピード部門に対する支援を行った。スピードスケート界を見てみると、全体として年々シーズンの開始が早期化しており、2019年度は10月初旬に北海道帯広市のスケートリンクにて各大学が練習入りした後、毎週試合に合わせて各地方を転戦し、最終的には1月末の日本選手権出場までスケジュールが埋まっていた。日本選手権に出場するにはジャパンカップの試合に出場することが条件となっていることから、学生としてはできる限り多くの試合に出場せねばならない。さらに、遠征費の負荷も膨大であることから一度現地入りしてしまうと、住居と往復することは非常に困難な状況になっている。つまり、スケート部スピード部門は、学業に取り組むのが最も困難な事例の部のひとつと考えられる。

そこで、保健体育センターを中心に、部長及び監督と連携して練習計画の見直しを行った。本事業実施に伴い保健体育センターで、同様にスケート部を持つ他大学へのリサーチを実施したが、具体的な施策を持ち合わせている大学は見当たらなかった。そこで、スケート部部長及び監督と協議し、最終的に「現時点で授業の受講が必須となる部員（卒業要件・進級要件を満たせない可能性がある者）については、東京都・千葉県など近隣にある室内リンク、もしくは比較的住居から近い、長野県エムウエーリンクで練習を実施する方法に変更する」という暫定的な変更を行うこととした。次年度以降については本年度の結果を踏まえ引き続き調整の必要が見られるが、一定の対処は可能になったと考えている。またスケート部に限らず特にウィンタースポーツには同様の問題が散見されることから、各部と密に連絡を取り合い、調整対応を目指していくことも共有された。

さらに、教学組織であるSSIカリキュラム委員会において、本件への対策が話し合われた。この委員会には、スケート部の部長ほか、複数の体育会各部の部長・監督も出席していた。2019年10月21日に開催されたこの委員会

では、競技活動によって複数回授業に出席することができない学生に対して学習機会を保障する必要があると、安易に単位認定を行うことがあってはならないとの一致した見解が示された。さらに、各教員によるスケート部スピード部門の学生への対応方法が報告された。たとえば、メールや LINE を使って課題を出したり、毎授業に伴って授業支援システムを用いて課題を出したりしているという事例が報告された。また、Skype を用いた遠隔授業の実施や、授業課題に関連する動画を配信して課題に取り組ませるといった先進的な事例も報告された。最終的に、早い段階から学生と授業担当教員が綿密にコミュニケーションを取る必要があるとの結論に至った。

4.5 小括

本パートでは、先に実施した各種アンケート・過年度の経験則等を踏まえつつ、研修体制の確立に向けた取り組みを実施した。結論から言ってしまうと、現時点では『体育会学生の意識改善』という点に焦点を当てた基礎的な内容にとどまっている。その点でいえば、今回訪問した他大学はいずれも、各分野で一步踏み出した施策を実施しており、本学も次年度以降の研修継続実施に当たっては、それぞれの大学の利点を参考にしつつ、新たなる研修体系の確立を目指していく必要があるように感じている。また、スピードスケートに取り組む体育会学生のように、学習支援が特に求められる事例については、本学が主体的に施策を実施し、その内容と成果を他大学と共有したい。

あとがき

スポーツ・ライフ・バランスを越えて、スポーツ・ライフ・インテグレーションへ

あとがきに代えて、本事業の成果や荒井(2018: 体育の科学)を参照しつつ、以下では、本事業の総括と今後の展望を行いたい。

体育会学生と文武不岐

本事業では、体育会学生のデュアルキャリアを考える際、スポーツ・ライフ・バランスが重要であることを検証した。ところで、デュアルキャリアに関連する言葉として、わが国には「文武両道」という言葉がある。わが国では、この文武両道こそが教育の要諦であると考えられてきた。文武両道が表しているのは、勉強と競技の両方に対して別々に力を注いで、勉強と競技それぞれが独立している状態ではない。文武両道とは、文武の根本はひとつであるという考え方である。

文武両道と似た言葉に、「文武不岐」という言葉がある。文武不岐とは水戸学の綱領のひとつであり(福島, 1978: 武道学研究), 文武は分かれているものではなく、重なり合っているべきという主張を帯びた言葉である。中世において、わが国では、文と武は世襲的に分かれ、それぞれの家業において、文あるいは武にいそむべきであるとされていたが(村上・中西, 1985: 武道学研究), わが国のスポーツ界では、まさにその状況が復古していないか。

私たちは、文武不岐の考えに基づいて、体育会学生と向き合うべきではないだろうか。それは、競技に取り組む者は、武を向上させることで文も向上するはずであるという考えである。武を向上させる過程で人間性が高まり、その結果として、必然的に文は高まるはずという考えでもある。

スポーツ・ライフ・インテグレーションへ

スポーツ・ライフ・バランスという考え方の典拠であるワーク・ライフ・バランスに関連して、昨今ワーク・ライフ・インテグレーションという考え方が示されるようになってきた。経済同友会(2008)によると、ワーク・ライフ・インテグレーションとは、「会社における働き方と個人の生活を、柔軟に、かつ高い次元で統合し、相互を流動的に運営することによって相乗効果を発揮し、生産性や成長拡大を実現するとともに、生活の質を上げ、充実感と幸福感を得ることを目指すもの」である。これをスポーツ・ライフ・バランスに置き換えれば、スポーツとライフを重ね合わせ、統合してゆく考え方である。これこそ、現代の体育会学生における文武不岐ではないだろうか。

スポーツ・ライフ・インテグレーション、つまり文武不岐が実現できたとき、スポーツ・ライフ・バランスは過去概念となる。スポーツ・ライフ・バランスという言葉がこの世から消え去ったとき、体育会出身者はスポーツ・ライフ・インテグレーションを実現することで、社会でリーダーシップを発揮し、わが国は大いに発展しているに違いない。

私たちはその時を夢見ながら、まずは目の前の体育会学生に対して、本事業の成果を活かして地道な取り組みを行う使命を託されている。

謝 辞

本事業の実施に当たり、筑波大学体育専門学群の教授であり体育会野球部長でもある木内敦詞教授、大阪体育大学体育学部の土屋裕睦教授、スポーツ局の浦久保和哉様・森田卓様、関西学院大学スポーツ振興課の堀口直親様・二宮健志様より、数多のご教授をいただきました。スポーツ・ライフ・バランスのゲームの開発に当たっては、千葉順様(株式会社 HEART QUAKE)にご尽力いただきました。お名前は記載しませんが、人事担当者インタビューでは、3 名の方々から貴重なお話を聞かせていただきました。法政大学体育会本部・第二体育会本部の学生たちからも、多くの協力を得ました。皆様に、心より感謝申し上げます。